

飛鳥地域の発掘調査

飛鳥藤原宮跡発掘調査部

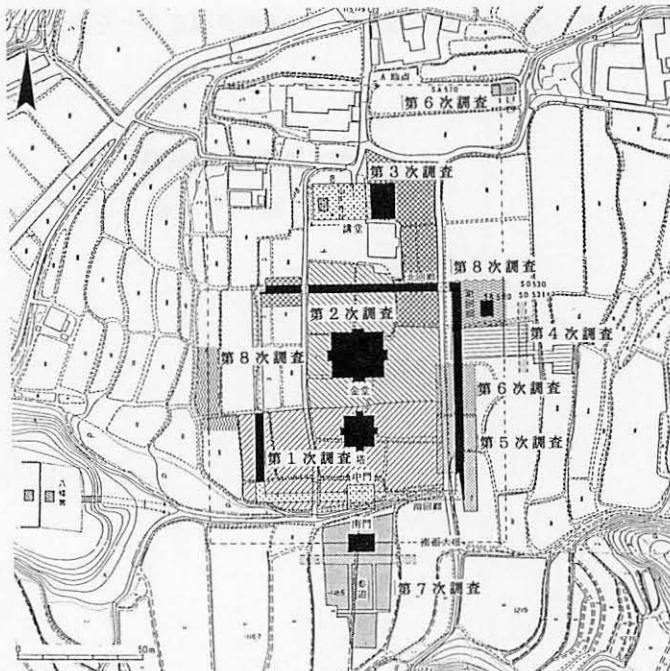
1990年度、飛鳥藤原宮跡発掘調査部では、飛鳥地域において石神遺跡・推定山田道・山田寺・坂田寺など6件の調査を実施した(17頁参照)。以下、主要な調査の概要を報告する。

1. 山田寺第8次調査

1976年以来、山田寺の伽藍主要部の調査を行ってきた。今回はこれまで未確認の回廊の東北隅と寺域西限の2ヶ所に調査区を設け、東回廊と回廊東側の区画の状況、西門の有無などを解明するために調査を行った。

東調査区の遺構 東回廊SC060は北端部5間分を検出した。単廊で、柱間寸法は桁行・梁行共3.8m、外側(東側)の柱筋のみ壁・連子で閉じている。基壇は幅6.4mで、柱心からの基壇の出は1.3m弱である。

北回廊の東端間に扉口SX666があって、ここには通常より大きい地覆石を並べる。東端のものには扉の軸摺穴が穿たれていた。扉は内開きである。西側の軸摺穴の位置を柱との位置関係が東側と同じと仮定して推定すれば、東西の軸摺穴間心心が2.2mとなり、東回廊の北から12間目で確認されている扉口と比べ約20cm広い。扉口を出した北側は基壇化粧の崩壊が著しいが、階段が設けられていた形跡はない。



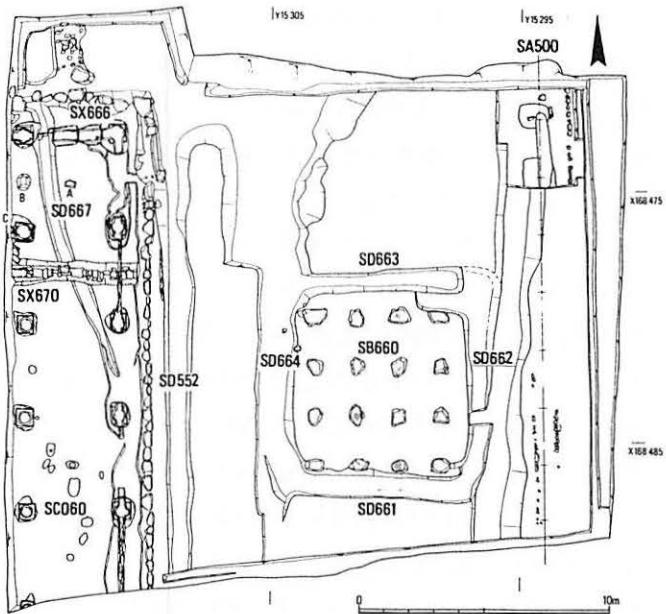
山田寺調査位置図(1:3000)

東回廊の基壇縁から0.5m外側に東雨落溝SD552がある。北回廊には北雨落溝はない。東回廊の北から2間目に榛原石の板石や瓦で組んだ暗渠SX760がある。この暗渠は北回廊の南雨落溝の延長部にあたり、東方への排水の施設と考えられる。暗渠の内径は幅18cm・深さ20cmとなる。西端の蓋には長さ101.5cmの巨大な四重弧文軒平瓦を用いていた。この暗渠は回廊造営当初に作られたものと思われる。

今回の調査区では回廊の建築部材は少なく、地覆3本、大斗・肘木・垂木各1のみで

ある。ただし、垂木は反り増しがある。当初材とすれば飛鳥時代の垂木に反り増しがあることになり、取り替え材とすれば大がかりな修理があつたことになる。

東回廊の東約6mに宝蔵SB660を検出した。3間×3間の総柱建物で、柱間は東西1.7m(5.5尺)、南北2m(6.5尺)の等間である。礎石は自然石で多くは上端を平坦にして使っている。この内4個の礎石上面には径が30cmの柱のあたりがある。四周に雨落溝が



山田寺第8次調査東区遺構配置図(1:300)

めぐって基壇状をなすが、実際には周囲の地盤面と基壇面の高さの差はほとんどなく、礎石上面で約25cm高いにすぎない。礎石は地山上に乳白色粘質土を積みながら据えているが、地山面を掘り込んだ古い礎石据え付け穴が存在することから、ある時期に地上げされたらしい。基壇出土土器からその時期は9世紀末から10世紀初頭と思われる。基壇周囲には雨落溝がめぐる。幅は1~1.5m・深さ20cmで、護岸施設はない。柱心から溝心まで、桁行・梁行共約1.5mである。埋土中から大量の木簡・木製品・建築部材や金属製品が出土し、これらの遺物には経軸・仏具・経帙の題籠などが含まれる。建築部材には茅負がある。隅の留めに切った部分もあり、宝蔵が入母屋造か寄棟造であったことを示す。

回廊基壇の東から約14mに南北方向の基壇状の高まりがある。奈良・平安時代の整地土を除去すると掘立柱の南北塀SA500が検出される。今回は北端一間分のみを検出した。柱間寸法は4次調査検出分も含めて約2.3mとみなすことができる。

西調査区の遺構 発掘区のほぼ中央を南北に掘立柱の柱穴が一列に並ぶ。これが寺域西限の塀(SA680)となり、東限の塀(SA500)とは伽藍中軸線を介して対称の位置にある。柱掘形は一辺1.5~1.8mのほぼ方形で、深さは2mに達する。柱間寸法は2.25mである。ただし発掘区南端から3~5間目は柱間寸法が広いため、門(SB685)と考えられ、これが西門となる。西門及び西門より北の掘立柱塀は原則として隣あう2本の柱を一体の抜取り穴を掘って抜き取り、その後抜取り穴を掘形として再度柱を立てている。

遺物 おもに東調査区から多量の遺物が出土した。このうち木器には、漆塗及び素木の経軸・漆塗函・漆塗の脚・漆塗厨子の扉・漆塗の茄子形仏具・漆塗の宝相華葉形仏具・八角台座・漆

塗の蓋の軸部等がある。台の足には奈良時代のものと平安時代のものがある。金属器には銅板五尊像・押出仏・唐草文透彫金具（木枠付）・六弁蓮華文飾金具・厨子扉の座金具と蝶番・釘等がある。銅板五尊像は、縦4.5cm・横3.7cm・厚さ0.25cmで、唐代の作品と考えられる。また、宝蔵基壇上面から1点、同雨落溝から6点の木簡が出土した。宝蔵での経典の出納に関する木簡があり、奈良時代後半から平安時代初期の山田寺の組織や活動の一端が窺える貴重な資料である。

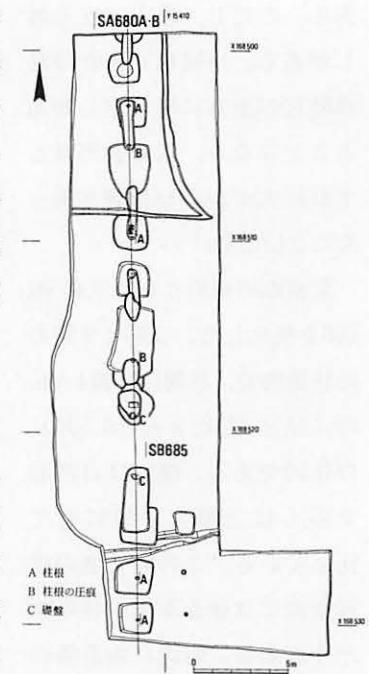
まとめ 回廊については北端に扉口の付くこと、垂木に反り増しのあることが新たな知見として加わった。宝蔵の発見も、山田寺の僧侶の生活に關係する施設を見出した点で重要なものであった。宝蔵はその所用瓦から7世紀後半の創建で、回廊等と同様10世紀末には廃絶していたと考えられる。西限の堀の検出により、伽藍を囲う区画の規模は東西118m・南北187mとほぼ確定した。西門は3間の規模ではあるが棟門程度の簡略なものであった。

2. 坂田寺第6次調査

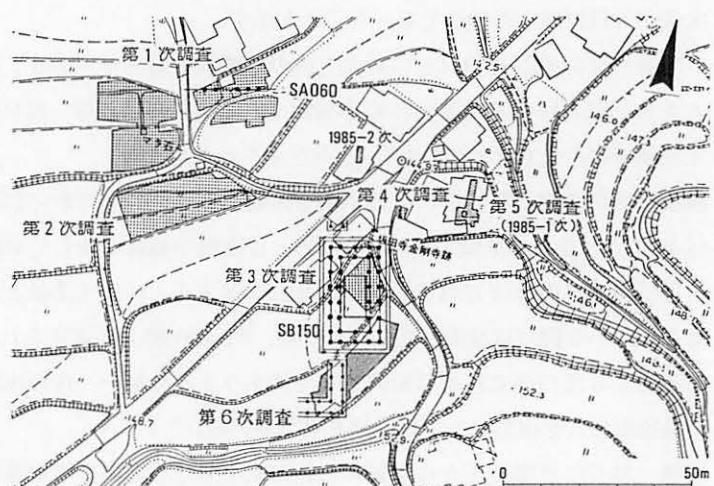
この調査は広場・園路工事のための事前調査として行った。第3次調査でみつかっていた仏堂SB150の規模・構造の確定、これに取り付く施設の検出を目的にした。

仏堂 SB150 長軸方向が北で西に約15°振れる南北棟で、西を正面とする。桁行5間・梁行2間の身舎の四面に庇がつく礎石建ちの基壇建物である。

基壇は二重基壇で、下成基壇の規模が29.5m（100尺）×17.9m（61尺）・高さ0.6m・礎石心から基壇の出が2.4m（8尺）、上成基壇が28.3m（95尺）×16.7m（56尺）・高さ0.4m・基壇の出が1.8m（6尺）である。基壇総高は1mであるが、これは雨落溝の底からの高さであり、基壇の上面と基壇の南外・西外との高さの差はほとんど無い。基壇化粧は上成・下成ともに方形の花崗岩自然石（一辺50cm前後）を一



山田寺第8次調査西区遺構配置図(1:400)

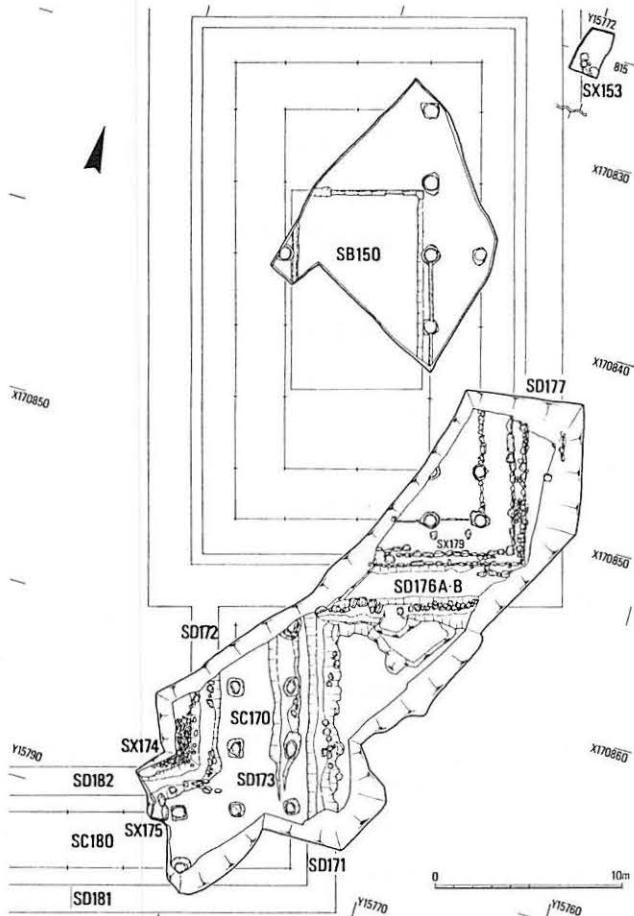


坂田寺調査位置図 (1:2000)

段並べるのを基本とし、東面の下成基壇のみ方形の石の上に小さい石を積んで二段とする。下成基壇の上面には拳大から人頭大の石を敷き詰めている。上成基壇上面は黄褐色の粘質土で堅く固められており土間床であったらしい。

建物の柱間寸法は身舎が3.86m（13尺）等間・庇の出が2.68m（9尺）であり、桁行総長24.7m（83尺）・梁行全長13.1m（44尺）となる。礎石は径2m前後・深さ0.7m前後の据え付け掘形の中に置かれ、礎石と穴の隙間には多量の礫が詰め込まれている。礎石は花崗岩を加工し円形柱座を造り出したもので、柱座径は62～68cmである。礎石3個の上には腐蝕した柱の根元部分が残り、柱の径は約55cmである。側柱・妻柱の礎石には、検出したすべての柱間について壁受けの地覆材と壁の根元部分が残っていた。地覆材は、礎石据え付け掘形を埋め戻した跡に礎石と礎石をつなぐように掘られた据え付け掘形（幅30cm・深さ30cm）の中に、自然石や方形博・平瓦を並べた上に置かれている。地覆材は現状では上に乗る壁の重さでつぶれているが、一辺20cm前後の角材と復原できる。壁は厚さ15cmで木舞を壁下地とし、それに黄灰色の壁土をつけて、表面には白土の仕上げを施している。東壁の南から2間目には柱間を三等分するように配された腰壁束の痕跡が残っていた。束は一辺16cmの角材である。基壇上および周辺から8世紀後半代の軒瓦がまったく出土しないことから、桧皮葺の可能性が大きい。

今回の調査でSB150の周辺の状況が判明した。当初、SB150の南面には幅3.5m・深さ1mの素掘り雨落溝SD176Aが設けられ、回廊はなかった。後に回廊SC170の建設に際し溝の南岸が石で護岸される（SD176B）。護岸を行う以前SD176Aの底には厚さ30cmほど砂が堆積しており、護岸はこの砂層の上に径20～60cmの自然石を一段並べ、裏込め土で固定することによって行われた。SC170基壇と重複する部分の裏込め土から平城宮土器IIの土師器が出土している。護岸石列が



坂田寺第6次調査遺構配置図（1:400）

SC170の基壇部分まで及んでいることから、SC170はSB150には直接には取り付かない可能性が大きい。SB150の東面には雨落溝SD177がめぐる。

回廊 SC170・180 南北回廊SC170の基壇は化粧をしておらず、幅は東西両雨落溝の肩間で4.7~4.9mである。礎石は花崗岩自然石で、地山を浅く掘りくぼめて据え付けられる。柱間寸法は桁行3.3m（11尺）・梁行3m（10尺）である。東西回廊SC180の柱間寸法は桁行・梁行ともに3m（10尺）である。調査区西端の礎石の西側に石組施設SX175がある。回廊の内側は拳大の礎を敷きつめて舗装しているが、この石敷SX174と回廊上面とは殆ど同じ高さである。

遺物 SB150、SC170・180にともなうもので、種別が判明する建築部材は、連子窓（連子子・框）・地覆・柱・頭貫・大斗・卷斗・幕股などである。地点別では、SB150で柱・地覆、SC170・180基壇上で連子窓・柱、SD182で柱・頭貫・大斗・卷斗・幕股が出土した。建物の基壇上およびSD171で検出した物の多くは腐蝕が進行しているが、SD182でまとめて出土した物は比較的残りがよい。軒瓦は35点で、しかも8世紀前半以前ないし平安時代に属し、仏堂や回廊に伴うものではない。SB150建立以前の谷の自然堆積層から7世紀前半、SB150基壇土から7世紀後半の瓦が出土している。埠仏はSD176Bの埋土から1点出土した。方形三尊埠仏の右脇侍菩薩の首から下を残す破片である。墨書土器には、SD171から「中」（土師器皿底部外面）、SD176Bから「廣万口」（土師器杯皿底部外面）を記すものがある。三彩陶器はSD176BやSD171を埋め尽くした堆積層から出土した。SD171から儀鏡化した海獸葡萄鏡が1点、SB150基壇上の堆積土から金銅製蝶番が1点出土。このほか鉄釘がある。仏堂上の焼土層から木心乾漆仏断片多数が出土した。金箔が貼られているが、尊名は不明である。

まとめ 奈良時代の伽藍中枢の建物と考えられるSB150の規模・構造が確定し、SB150の造営年代についても、今回基壇版築土から7世紀後半の瓦が出土したので、7世紀前半まで遡らないことは確定した。また、仏堂は立ち腐れで倒壊し、廃材の焼却が10世紀後半に行われたことがわかった。回廊の存在が判明し、位置・規模・構造についての手がかりが得られ、その建設がSB150より遅れることが判明した。しかも、回廊造営の上限年代は奈良時代前半である。

3. 石神遺跡第9次調査

遺構 第9次調査は第8次調査区の北に接する水田を対象とした。検出した主な遺構は、7世紀中頃から8世紀にわたり、大きくA期（7世紀中頃：齊明朝）、B期（7世紀後半：天武朝）、C期（7世紀末~8世紀初頭：藤原宮期）、D期（8世紀前半：奈良時代）にわけられる。

<A期> 飛鳥寺・水落遺跡の北に東西大垣SA600ができ、石神遺跡の形成された時期である。従来、井戸SE800から発する石組溝と建物の変遷から3小期に細分している。

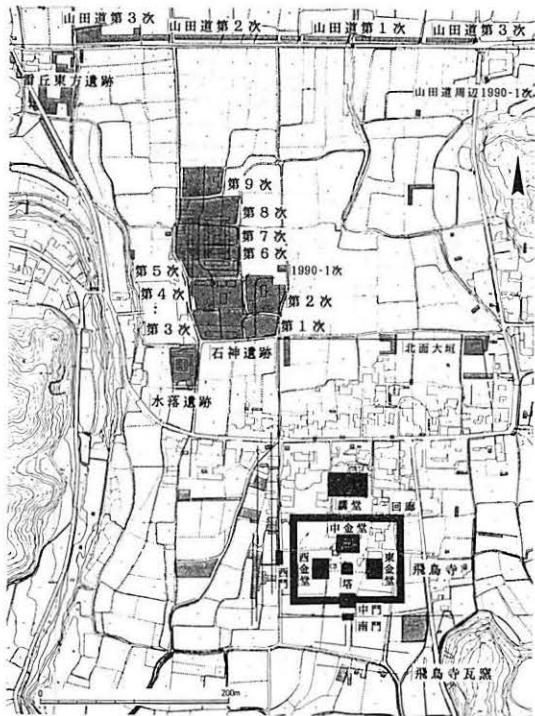
（A-1期） 調査区中央を走る南北石組溝SD1210は、最下段の石しか残っていない。内法20cm。南北石組溝SD1345は、内法1.5mで、側石は東は20~25cm大の1段分、西は10~20cm大の石が2~3段残っていた。SB1550は東側柱列5間分を検出した。南北塀SA1524は4間分を検出。これと逆L字状に接続する東西塀SA1525は2間である。SB1550の南側柱はSA1525とほぼ揃う。

(A-2期) 井戸 SE800から発する南北石組溝 SD900は総延長120mをこえる。溝掘形の幅約2m, 石組の内法幅65~85cmで, 側石はほとんど最下段しか残っていない。SD900の東側約4.5mに南北棟建物 SB1485とSB1325とが東側柱筋を揃えて南北に並ぶ。SB1485は桁行9間・梁行3間で, 東側柱から約60cm東側に, 建物基壇縁石 (SX1486) が一部残る。SB1325は第8次調査で2間分を検出し, 今回の北側柱列の検出で, 桁行4間・梁行2間の南北棟建物となった。石組溝 SD900の西約13.5mには, 建物 SB1530とSB1540とが東側柱列をほぼ揃えて南北に並ぶ。両者とも3間×3間の総柱建物である。南北石組溝 SD1520は幅約30cmで, 20cm大の側石が1段残る。底に小礫を敷く。SB1530・SB1540の東側柱列から約1.5mで, 両建物の雨落溝と考えられる。

(A-3期) 南北石組溝 SD900は存続するが, 他の建物はすべてこわされる。石組溝 SD900の東側には特異な平面形態のSB1480が建つ。全体の規模・形状は明らかではないが, 現状では, 2間×2間の空間が四方に突出した十字形の建物の可能性がある。建物内部には柱がない。柱間は2.5m等間で, 建物の南北長は15mである。石組溝の西方には総柱建物を中心とした建物群がある。SD900の西約1.5mにSB1500とSB1510が西側柱列をほぼ揃え, 南北に並ぶ。SB1500は3間×3間の総柱建物で, SB1510は梁行2間の南北棟建物である。これらの建物の西11.5~12.5mには総柱建物 SB1535・1545が南北に並ぶ。両者とも3間×3間と考えられる。

<B期> A期の遺構がすべてこわされ, 新たに整地して前代とは全く遺構の配置が異なる時期である。SB1515は桁行12間以上・梁行3間の長大な南北棟建物である。この建物の東には布掘りの柱掘形をもつ南北棟建物 SB1505がある。桁行4間・梁行3間の総柱建物である。布掘りは東西方向に幅約1m, 長さ5.7mの規模で, 全体を一段掘り下げ, 柱位置だけを約50cm深く掘る。北側柱・南側柱列はSB1515の柱位置とほぼ揃う。SB1505の東約3mには南北堀 SA1490がある。柱位置はSB1515の柱間のほぼ中央になる。調査区東端には南北堀 SA1475がある。

<C期> B期の遺構はすべてこわされる。南北溝2条がある。SD1347はSD900の東の素掘溝で, 南から続く南北道路の西側溝 SD640が第8次調査区で折れ曲がり, 約14mほど西に流路を変えたものである。当初は幅約2.5mの素掘り溝で (SD1347A), 後に西岸に50cm大の石を雜



石神遺跡周辺調査位置図 (1:8000)

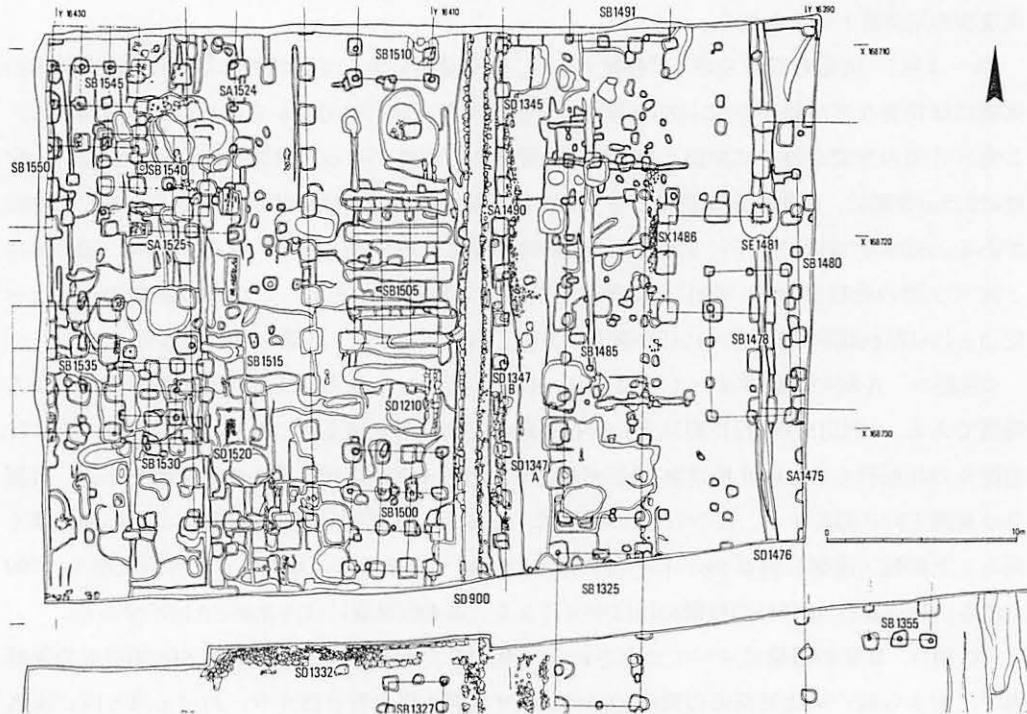
に並べて護岸する (SD1347B)。SD1476は幅0.7~1.2mの素掘溝で、西半が1段深くなる。

<D期> SB1478は桁行4間・梁行2間の南北棟建物である。SB1491は南側柱3間を検出した。井戸SE1481は、径約2mの円形掘形の中央南寄りに石組の井戸枠がある。石組は最下段が残るのみで、20~30cm大の石を内法一辺約70cmの方形に据えている。底面は小礫を敷く。

出土遺物 土器類は、7世紀後半から8世紀前半の土師器・須恵器が主である。土製品には、土馬・硯・フイゴ羽口などがある。墨書き土器にはSE1481から「上」(土師器皿口縁部外面)・「来田口司」(土師器甕体部外面)を記す2点がある。瓦の出土量はごくわずかである。金属製品では鉄製の釘・鎌・刀子・斧・紡錘車・カスガイなどがあるが、全体の量は少ない。木製品ではA-2期の整地以前の、木屑を多く含む砂質土中から斎串が出土した。

まとめ 前回の調査では、各時期の主要遺構がまとまりをみせた。特にA-3期では、長大な建物で形成する狭長な東区画と長廊状建物で囲む西区画の両者について、その北を画する建物を検出した。こうした状況から、今回の遺構のあり方が注目されたが、石神遺跡の北を限る施設は検出されず、各時期ともに遺構がさらに北に続くことが明らかとなった。

A期では、A-2期について、北方にまとまった建物群があることが明らかとなった。第8次調査で検出した東西棟SB1320と逆L字状に2棟の南北棟建物が東側柱列を揃えて建ち、西南には東西棟SB1340がある。西北方には倉庫と思われる総柱建物2棟が南北に東側柱列を揃えて並ぶ。A-3期では東区画の北方に約30mの間をおいて、特異な平面形の建物の存在が明らかとな



石神遺跡第9次調査遺構配置図 (1:400)

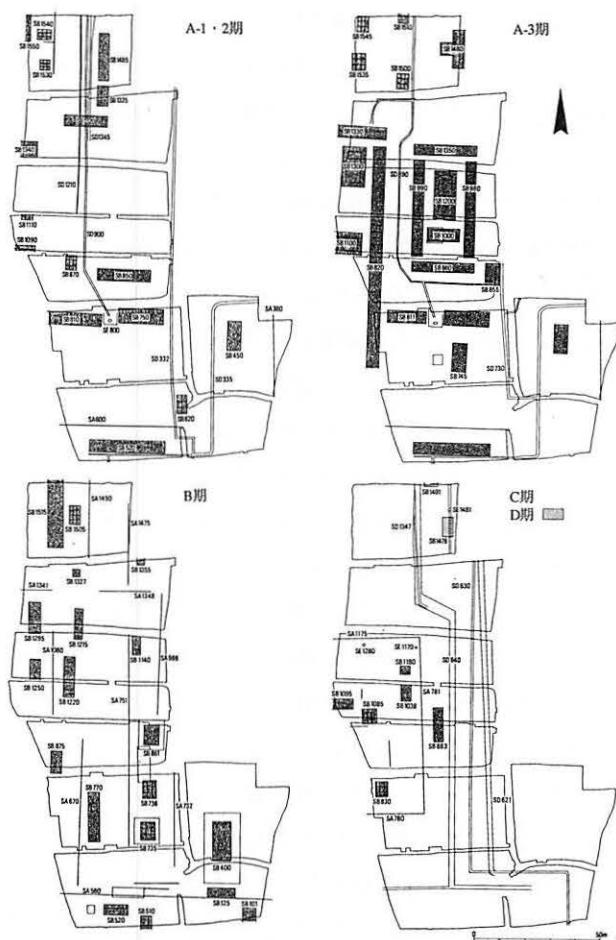
り、特殊な建物配置をもつ空間がさらに北へのびていることが想定される。一方、西区画の北方には総柱建物を中心とした建物が並んでおり、東西両区画の倉庫群がこの位置にあったことが判った。B期は南北堀と南北棟建物を検出し、これまでと同様の状況がさらに北に続くこととなった。ただ、今回検出した南北棟建物は桁行12間以上という大型建物であり、この時期の中心的な建物の一つと思われる。C期の遺構は、前回調査区から希薄となってきており、南北溝の他には遺構は検出できなかった。今回の調査で、新たに奈良時代初期の遺構を検出した。石組の井戸SE1481とその周辺に小規模な建物がある。井戸からは墨書き土器も出土しており、奈良時代の遺構がこのあたりから北方に存在することをうかがわせる。

4. 山田道第3次調査

1988年度から始まった県道「橿原神宮東口停車場飛鳥線」の拡幅工事に伴う事前調査で、今回は7世紀代を中心とする遺構群の広がりと「山田道」関連遺構の解明を目的として実施した。第3次調査は第2次調査区の西延長66.5m分について行ったが、他に第1次調査区の東で小面積の調査も行った。検出した主な遺構は古墳時代・7世紀・7世紀末~8世紀のものである。

古墳時代の遺構 調査区西部にある南北溝SD2634は北々西に流れる溝で、出土遺物から5世紀後半のものである。

7世紀代の遺構 第2次調査で明らかになったように、調査地は西に緩く傾斜し、雷丘との間が谷状地形となっており、これを7世紀前半から中頃にかけて埋めたてている。今回、この整地土の西端を検出し(SX2630)、東西幅が110mに達することがわかった。西端部はほぼ方眼方位にそって直に立ち上がっており、落込みにそって堆積した黒褐色土から6世紀末に位置づけられる「飛鳥寺下層」式の土器類が出土した。この整地と一連の工程で作られた東西方向の石



石神遺跡主要遺構変遷図 (1 : 3000)

詰暗渠 SX2601は第2次調査区からのびて総長約80mとなり、南北暗渠 SX2622に接続する。SX2601は幅0.8~1m、東でわずかに北に振れる。石積は粗雑で、さまざまな大きさの石を一定幅に積み上げただけである。SX2622と第2次調査区の南北石組暗渠 SX2600とは、SX2601が受けた水を北へ排出するものであろう。掘立柱建物 SB2631は東西4間（柱間2.4m）・南北2間以上（柱間2.1m）で、7世紀後半に位置づけられる。

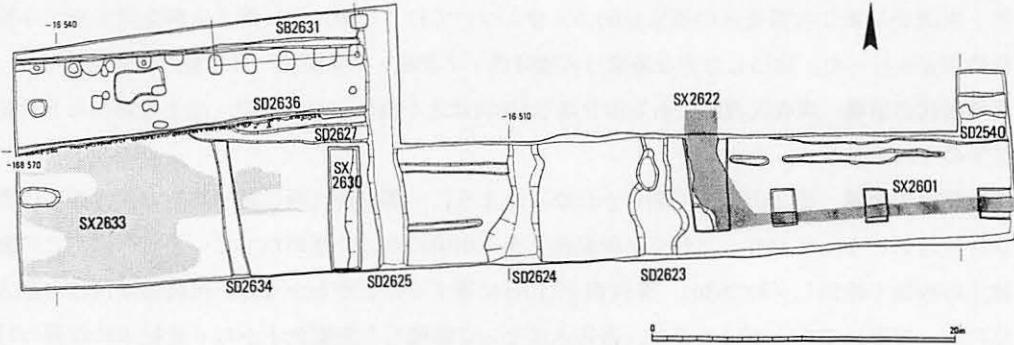
7世紀末~8世紀の遺構 3条の南北溝 SD2623・2624・2625が等間隔で並ぶ。いずれも素掘りの浅いU字溝で、北流する。堆積土は粗砂で多量の土器類の他、SD2623から木簡が4点、SD2624・SD2625から金銅製鉈・鉄製鎖状金具・黒漆塗帶金具、および隸開の和同開珎が出土した。東西溝 SD2540は第2次調査区から続く東西道路 SF2607の北側溝とも考えられるもので、SD2625と合流する。石敷 SX2633は調査区の西部南半に広がる礫層で、人工的に敷いた可能性が強い。北端は中世の溝 SD2636で切られているが、東西溝 SD2627を北側溝とする路面敷きの可能性もあり、東のSF2607に対応するかもしれない。

まとめ 3次にわたる調査により、この地域の利用状況の一旦を窺うことができた。東半部の微高地は弥生時代から古墳時代にかけて継続的な土地利用が想定できる。

古代においては、第2次調査東区西部から第3次調査区の東3分の2にわたる、東西幅110mに達する沼状地形の存在が明らかになった。この沼状地形は、塊石を詰めた暗渠を伴う大規模な整地によって埋め立てられており、さらに北方へ広がっていると思われる。整地土は現状でも厚さ0.6mあって、しかも北へゆくほど厚くなるので、きわめて大規模な土木工事であったと思われる。飛鳥盆地北部の大官大寺周辺の黄褐色の山土を含むもう一つ別の整地土の広がりが確認されており、7世紀前半における飛鳥地域の大開発を物語るものである。

第3次調査区の西方一体に「雷丘東方遺跡」が広がる。「小治田宮」墨書き器の出土によって奈良時代の小治田宮がこの地域に存在した可能性が強まったが、第3次調査区西部から11点の奈良時代軒瓦とそれに伴う丸・平瓦がかなりの量出土したことによって、その蓋然性はますます高まった。特に難波宮と同様の軒瓦の出土が注目され、今後行う周辺の調査にますます期待がかかるのである。

（安田龍太郎・深沢芳樹）



山田道第3次調査遺構配置図（1:500）